

八朔相撲に関する史的一考察

— 大國魂神社八朔相撲祭の起源に着目して —

松本 彰之 (日本体育大学大学院博士後期課程)

A historical study of *Hassaku Sumo Wrestling* — Focusing on the Origin of *Hassaku Sumo Wrestling Festival* of the Ookunitama Shrine —

MATSUMOTO Akiyuki

(Graduate School of Health and Sport Science, Nippon Sport Science University)

Abstract

The Ookunitama Shrine in Fuchu City, Tokyo, is a shrine that enshrines Ookunitama no ōkami who is the mikogami, the son of Susanoo. The Ookunitama Shrine used to be a shrine in Kokufu (the capital of the historical Provinces of Japan) that was referred to as Rokusho-no-miya Shrine and Musashi-no-Soja. The *Hassaku Sumo* Festival is a festival held in the Ookunitama Shrine.

The sumo arena in the precincts of the Ookunitama Shrine has a monument built in August 1, 1990. The epigraph says, “The Ookunitama Shrine *Hassaku Sumo* is a venerable sumo festival whose Mizuhikimaku curtain was dedicated by the Shogunate for the purpose of encouraging physical activities and which originally started as dedicatory sumo matches to pray for the peace reigns over the land and the huge harvest (of the five grains) in commemoration of the fact that Tokugawa Ieyasu-ko (Lord Ieyasu Tokugawa) made an entry into the Edo Castle in August 1, 1590”. However, currently there is no evidence for the “dedicated Mizuhikimaku curtain” or a document which provides an evidence for the “purpose of encouraging physical activities by the Shogunate”.

Most of the festivals in Japan with the word “*Hassaku*” are those which have their origin in August 1 (August is “*Hachigatsu*” in Japanese, while 1 is “*Sakujitsu*” in ancient Japanese) that has the significance related to agriculture such as wish for a good harvest and disaster prevention, or those which were started by the feudal lord who gave a special meaning to “*Hassaku*.” The *Hassaku Sumo* Festival was quite a rare case in that it was said to originate from the commemoration of the triumphal entry into the Edo Castle by Lord Ieyasu Tokugawa.

This study suggests that Ookunitama Shrine and the Tokugawa Shogunate continued their close relationship, based on the historical examination of sacred treasures kept in the Treasure Hall of Ookunitama Shrine as well as the history and literature on Ookunitama Shrine.

And it presents a possibility that these close relationships may have influenced the *Hassaku Sumo* Festival.

These close relationships can be said to have had sufficient influence on *Hassaku Sumo* Festival at Ookunitama Shrine to be regarded as originating from the commemoration of the triumphal entry into the Edo Castle by Lord Ieyasu Tokugawa.

1. はじめに

東京都府中市宮町に鎮座する大國魂神社は、景行天皇41年（111）5月5日大神の託宣の命により素戔鳴尊の御子神である大國魂大神を祭神として祀った神社である。大化の改新のおり、この地に国府が置かれ、国司が国内の祭務を総轄することから武蔵総社と称された¹⁾。その頃が、例大祭「くらやみ祭」の起源とされる。

大國魂神社に関する研究²⁾では、TEM研究所（1984）による、「例大祭の町方と講中」の研究報告がある。敦賀英輔（2009）は、くらやみ祭の調査を通して、祭りへの関わり方が人間性の回復に資する可能性を述べた。また、中里亮平（2010）は、「変更からみる祭礼の現代的状況」の中でくらやみ祭の変遷を中心に報告している。ただしこれらの報告は、くらやみ祭に関するもののみである。

2. 問題の所在

この大國魂神社では、通称「大國魂神社八朔相撲祭」と呼ばれる祭³⁾が、毎年八月一日に行われている。神社の境内には、昭和61年8月1日に八朔相撲実行委員会によって建立された旨を記された相撲場がある。またその脇には、記念碑がある。碑文は以下の通りである。

大國魂神社 八朔相撲四百年記念碑

大國魂神社八朔相撲は 天正十八年（一五九〇）年八月一日 徳川家康公の江戸入城を記念して天下泰平、五穀豊穰を祈る奉納相撲として始まったもので 体育奨励⁴⁾の目的を以て幕府より水引幕を献納せられた由緒ある相撲である。

旧四ヶ町により伝統行事として毎年行われたもので 現在では大國魂神社四ヶ町八朔相撲会主催により 小学生から大人までの幅広い参加者により 絶えること無く受け継がれている。

茲に 八朔相撲四百年を記念し相撲場並びに 記念碑を建立し後世に伝承せんとするものである。
平成2年8月1日建立

八朔相撲は、「徳川家康公の江戸入城を記念して天下泰平、五穀豊穰を祈る奉納相撲」であるとしたこの記念碑は、大國魂神社に伝えられている、徳川幕府より「体育奨励の目的を以て」献納された「水引幕」が現存するという口伝⁵⁾をもとに記された。八朔相撲祭は、家康の江戸城入城の日を祝して八月朔日に行われてきたとされる。

八朔相撲祭の起源に関してはこの他に、高橋晴俊⁶⁾は、「八月一日の『八朔相撲祭』は家康公の江戸打入りを記念して、江戸時代から始められたものである。この行事に家康公より賜った土俵四方柱の『みずひき幕』が現存する。」と述べている。さらに、府中市の市報でも、「徳川家康が江戸城へ入城の際、天下泰平の祈願と体育奨励を目的に、水引幕を献納したのが始まり⁷⁾」という記述が見られた。

「水引幕が献納された」のが事実である可能性は否定できない。ただし、「体育」という概念のない江戸期の「領民の体育を奨励するため」の意向が、水引幕を用いて大國魂神社と徳川幕府にどのように現代に伝えられたのかは、それらの経緯については、碑文や文献に記されておらず、未だ明らかではない。

本研究では、八朔相撲祭と徳川幕府の関係性を明らかにすることを目的とする。家康の江戸城入城から今日に至るまでの大國魂神社に関わる人びとの具体的な活動を中心に史的考察し、大國魂神社の八朔相撲と徳川幕府との関係性を明らかにしていきたい。この関係性を明らかにすることは、八朔相撲の起源を解明することに繋がるものと考えられる。

3. 「八朔」について

(3-1) 八朔の意味

「八朔」の意味について、大國魂神社の説明は次のとおりである。「この日は昔から吉日とされ、各地で祭礼⁸⁾が行われます。夏の忙しい畑仕事も一段落し、稲の初穂を神に供え、豊作を祈願するので、『田の実（頼巳）の節』ともいわれました。さらに台風シーズンを前に、農作物が

自然災害を免れるよう祈るのです」として、「八朔」には、一般的に農事と関係した意味が含まれるとしている。全国で行なわれている「八朔」の名を冠した数多くの祭のなかには、このように、農作物の豊作を祈ることも目的のひとつとして行われてきたものがある。

和歌森太郎は、八朔習俗にはじめて歴史的な考察を加えた。和歌森は、「八朔考」で八朔の稲虫退散・馬節句・憑の節句の前後関係について、「鎌倉末期から公家社会でも行われるようになる八朔憑の贈答は、武家社会からの移入であり、さらに武家社会のそれも、元来は農村における民俗の展開である」とした⁹⁾。平山敏治郎は、「八朔習俗」のなかで、「中世における武家の八朔習俗は彼等の発明ではなく、平安朝以来の村落の指導者であり、武具をとった百姓階級の習俗であり、この田舎武士の習俗が、蔑まれながらも、時とともに京都の貴族にも受容されたのであるし、文化上昇の問題である」とした。そもそも農事の安穩のために、八朔の行事は重要な位置を占めていたのである¹⁰⁾。

二木謙一は、和歌森や平山らが、八朔の意味は、「農村習俗からの展開である」としたことに加え、「時代の経過とともに、公武に行なわれた風習が民衆に下降し、それが元来の農村習俗にも大きな影響を及ぼす」とした¹¹⁾。さらに、八朔の意味の変遷について、「元来八月一日には、八朔の憑たのみとか、憑の節句と称して、物品を贈答する風習があったのであり、室町幕府ではこれが公式の年中行事となっていた」とし¹²⁾、「江戸幕府の八朔は、この室町期以来の贈答の風習と、家康の江戸入り記念の祝賀の儀¹³⁾が重なったものであった」とした。

他方、八朔習俗¹⁴⁾の分布に関して、服部比呂美は、二木が、室町期において馬節供などの習俗が農村社会の文化であったことに対し、「馬節供の呼称は、室町幕府の本拠地であった京都周辺にはまったく見られないし、広島と香川という局所的な地域に分布している¹⁵⁾」として京都から流入したとの可能性を否定した。また、山田

邦明は、室町以前の記録である海老名季高の「鎌倉年中行事」をもとに、関東の「八朔御祝」の内容に関して、この八朔の儀は、鎌倉から古河に移った公方が継続して行っている点¹⁶⁾や、南関東を治めていた北条氏の領国でも存続している点¹⁷⁾を明らかにし、京都以外の他国の回路の展開を紹介した。それらに対して、服部は、「八朔儀礼は鎌倉府から古河、南関東のように京都とは異なる場でも展開し、徳川氏のそれにつながってゆくという別の回路が想定できるのではないか¹⁸⁾」という新たな方向を示し、西讃地方の馬節供が「もともと在所の民俗にはなく、そこを治めた領主によって特化された八朔行事となった可能性がある¹⁹⁾」と説明した。

これらのことから、農作物の豊作を祈るといった農事に関連した農村習俗の「八朔の意味」は、時代の変遷のなかで公武によって物品贈答の意味を加えられ、またその習俗が農村に降りあらためて「田の実(たのみ)」の意味を含んだ贈答を伴うものとなったとみることができる。ただし、「八朔の意味」や「八朔儀礼」の分布や派生経路に関しては、江戸や京都からの展開か、領主により特化されたのか、またそれ以外によるものか定かではない。

(3-2) 全国の八朔祭りや八朔相撲

「八朔」の名を冠した数多くの祭りや相撲は現在も全国で行われている。秋田県由利本荘市矢島の八朔祭をはじめ²⁰⁾、長野県小諸市小諸八幡宮の八朔相撲、三重県名張市國津神社の八朔祭、京都府京都市松尾神社の八朔相撲、山口県丸山稲荷八朔大祭、滋賀県大津市南小松八幡神社の八朔相撲、愛媛県愛南町緑八朔相撲(弓削大社)、千葉県柏市富勢八朔相撲、京都府京都市八大神社八朔祭、京都府福知山市大江町豊受大神社(元伊勢外宮)八朔祭、熊本県山都町八朔祭、茨城県ひたちなか市那珂湊天満宮八朔祭、福井県美浜町新庄八朔祭、島根県益田市八朔祭流鏝馬神事など数多い。これらの祭の起源の説明のなかには、武家事礼、農耕事礼に関係するもの、どちらもが関係し

ているもの、どちらも関係していないもの、それ以外のもの、そして明らかでないものがあり、事情は様々である。

まず、長野県小諸市小諸八幡宮の八朔相撲²¹⁾は、慶長13年(1608)、小諸城主であった仙石越前守秀久が中山道八幡神社を当地に勧進し、始めたものと伝えられている。この八朔相撲は、八幡宮の祭礼行事として位置付けられてきたもので、陰暦の八月朔日(一日)に行われていることから「八朔」の名があるとされる。6歳~14歳までの子どもが金糸銀糸で繡箔(刺繍で飾る)した燦然たる化粧廻を締めて土俵入りを行う。子どもが主役の相撲祭ということや、武家である城主の指示で始めた点など、大國魂神社の八朔相撲祭と共通している部分もある。その意味では服部のいう「そこを治めた領主によって特化された八朔行事となった²²⁾」との典型例ともいえる。ただし、大國魂神社の八朔相撲祭のように、特に徳川家康の江戸城入場を祝ってとの記載はいずれの文献にも見られない。

次に、京都府京都市松尾大社の八朔祭²³⁾は、「八朔とは、旧暦8月1日(朔日)の事で、このころ台風や病害虫の被害を蒙ることが多いため、風雨を避け、順調な五穀豊穡、家内安全を祈ることを目的として、130年前の明治18年からある祭り、以前は9月1日に行われ、昭和51年以降現在では、9月の第一日曜日に執り行われている」として、「風雨順調・五穀豊穡を祈る事を目的として、明治の時代から当大社の公式祭典として斎行されてきたお祭り」とされている。このなかの「八朔相撲」については、「社伝では、鎌倉時代から今日まで連綿と続けられている」として、記録として、江戸時代初期の神主「秦 相宥」編纂の「松尾年中行事次第記巻中」に記述がある²⁴⁾。しかし、この八朔相撲もまた、家康の江戸城入城との関係で始められたとされてはいない。このように見ていくと、大國魂神社の八朔相撲祭のように、家康の江戸城入城を祝って始められたと謳っているものは見当たらない。

4. 八朔相撲祭の歴史

(4-1) 江戸期の八朔相撲祭

大國魂神社の八朔相撲祭だけが、ことさらに家康の江戸城入城を記念として始められたとされているのはなぜであろうか。大國魂神社(六所宮)には、家康より社領として五百石を寄進されたことを記した文書が、宝物殿に、現在も保存されている²⁵⁾。このことは、官幣小社大國魂神社により編纂発行された『武藏總社大國魂神社史料 第一輯 新撰總社傳記考證』にも記され²⁶⁾、朱印状の文面も掲載されていた²⁷⁾。これらの史料は、大國魂神社の八朔相撲祭が、徳川幕府の何らかの意向に沿って始められたとするだけの関係性の存在を示している。

(4-1-1) 徳川家康と大國魂神社

大國魂神社は、徳川家との関係が深い神社とされていることを示す一つの根拠は、家康が関東入国した後の社寺に対する保護政策である。家康は「同社には、天正十九年十一月社領五万石を寄進し、慶長十一年(1606)三月には社殿を造営している²⁸⁾」とされている。この他、「慶長十一年社殿の造営の際に、樺並木の補植(現存する大樺はこのときのもので、国の天然記念物に指定されている)とともに並木の両外側に長さ二八〇間・幅四~五間の馬場を寄進し、馬事振興に努め、馬市に対して制札を下し、これを管理した²⁹⁾」とされる。

また、「元和三年の日光御遷座のとき三月二十一・二日の二日間、神柩は同社の西方にあった府中御殿に泊まられている³⁰⁾」とあるが、この府中御殿は、天正十八年に家康により築造されたものであった。さらに、「御遷座のときは、神柩を安置するための仮殿が設けられた³¹⁾」とされ、その仮殿は、元和四年、將軍秀忠の命によって境内に東照宮が勧請されたときに、その東照宮の社殿として移築されたということであった。

この他、大國魂神社には「大阪両陣戦勝の神恩を感謝するため、御厩より馬三頭を馬場大門に引

き、本社と東照宮に参拝する『御吉例御馬規式乗』と称する神事があった³²⁾とされる。これらは、大國魂神社と徳川家との関係は、他の社寺と比べても格別に深かったことを示唆するものである。

(4-1-2) 江戸期の八朔相撲

江戸期の八朔相撲に関して、猿渡盛道が寛永元年に記した『六所宮縁起』³³⁾『武藏總社六所宮縁起社傳』³⁴⁾には、八月朔日の記録はなかったものの、猿渡盛房は『六所宮傳記』³⁵⁾において「大祭及び舊儀」として、「八月朔、終日祭儀、少陰之中月也、五穀豊登祝之祭也、及庭上於角觚之儀有」と記している。また『武藏總社略記』³⁶⁾で猿渡盛章は、「年中神事」として「八月朔日 終日神樂、此日庭上角力の儀式あり」と記述している。これらのことから、少なくとも寛政十二年(1800)には、八月朔日に八朔相撲祭の原型の相撲が行われていたと推察できる。ただ、それ以前の八月朔日に、相撲が行われていたことを示す史料は見当たらない。また、「終日神樂」の後の庭上角力の儀式がどのようなものであったのかも具体的には記されていない³⁷⁾。

八月朔日の相撲に関して、『武藏總社誌下巻』³⁸⁾では、以下のように記されている。

八月朔日、朝御神事、卯上刻、神主以下總神官参殿、鏡餅に抜穂稻を添て獻る、別に月次恆例の御饌を獻る、御正殿祝詞の儀、前殿御神樂等の次第、例の如し、此日庭上に於いて相撲の儀あり、此は秋稼豊穰を賀する意なりとぞ³⁹⁾、(後略)

これは、猿渡容盛による文章である。「相撲の儀」について「此は秋稼豊穰を賀する意なりとぞ」と記している。容盛は、幕末に徳川家から外交問題に関して意見を求められ、開港するべきと建白し、また明治期では任官し、尊王の志が厚く大義に明らかな人物であったと伝えられている⁴⁰⁾。徳川幕府の御威光に影射す幕末にあって、「八朔」の意味を徳川家に関連する「八朔の祝

義」ではなく農事に関する意味であると、殊更に強調しているようにも解される。

(4-1-3) 大國魂神社の御田植祭

明治になって途絶えたが、かつては例大祭のくらやみ祭の翌日に、「御田植祭」⁴¹⁾という祭が行なわれていた。この御田植祭の様子について猿渡盛厚は、『武藏府中物語』の「御刀代田の神事」の項で⁴²⁾以下のように詳しく述べている。

当日早旦、先ず御本殿で祭典を終つて、神職一同及び神領地の村長等が、早乙女数十人、田夫数百人を催したてて、楓の若葉で飾つた傘傘というものの上に白鷺の形を造り立て男の児が先導で太鼓を打ちならしつ、祝言をせんばいこうじのからかさ、さすやまのこれもの(意味不明)

と唱えながら、一同御供田に下りて田植を始め。植田の中では、男の児等があまた裸体になって、植えた苗を踏み荒しながら、相撲を取つて戯れるのだが、それは早乙女や田夫の労苦を慰めるためだ⁴³⁾とのことである。

この記述は、盛厚がこの神事を行っている神社側の立場であることから、事実に近い可能性が高いと推測される。「早乙女数十人、田夫数百人を催したてて」とあることから、かなりの大人数である。もとよりこの御田植祭が行なわれる田は、御供田であり、早乙女や田夫が食するための米を作る田ではない。彼らの労働はいわば奉仕である。

また、「男の児が先導で」や、「男の児等があまた裸体になって、植えた苗を踏み荒しながら、相撲を取つて戯れる」とあり、この神事では「男の児」と「相撲」が一定の役割を担っていると考えられる⁴⁴⁾。「早乙女や田夫の労苦を慰める」とあるとおり、田植は決して楽な仕事ではない。それにも関わらず、人びとがこの神事に遠方より参加している理由について盛厚は、以下のように記している⁴⁵⁾。

申すまでもなく御供田は、一年中の神供用の御供米を耕作する斎田であるが、誰でも苗を一株でも植えれば、その年は病気災難にかからないばかりではなく、自家の農作物までもがよく出来るといって、近郷近在の人がめいめいに自家の苗代から、苗を携えて植えたのである。特に江戸城の大奥からも、姫君たちがお出になって、手づから苗をさしたそうである。

このように、この御供田に苗を植えるという行為は、人びとにとって、単に田に苗を植える意味だけではなく、「病気災難にかからない」「自家の農作物までもがよくできる」との祈念が込められていた。これらの記述は当時、周辺で稲作が行われていたことを示唆している。御田植祭の田は大國魂神社の御供田であり、その田で実った米は、人びとが食すためのものではなく、供えられるための神聖なものである。農耕儀礼と神事である御刀代田の神事が一体化したものといえる。また、「江戸城の大奥からも姫君たちがお出になって、手づから…」とあるところから、ここでもまた大國魂神社（六所宮）と江戸城との関係の深さ・親密さ⁴⁶⁾がうかがわれる。

これらの御田植祭⁴⁷⁾の記述より、大國魂神社（六所宮）には五穀豊穡を祈念して人びとが早苗を挿しに遠方より集まる祭があったことが示された。御田植祭⁴⁸⁾には、農事への祈念の意味が込められていた。また、御田植祭は、子供に田の中で相撲をとらせながら丈夫な稲が育つ不思議を祝す意味の込められた神事⁴⁹⁾であった。農耕儀礼に御田植祭の神事、そして従来の八月朔日の神事の庭上相撲⁵⁰⁾の要素が合ったものが、現在の八朔相撲祭の萌芽となった可能性もあるということが出来る。

(4-2) 明治・大正期の八朔相撲

江戸期に始まったとされる八朔相撲祭は、大國魂神社（六所宮）の周辺の府中宿⁵¹⁾と呼ばれていた府中三町の番場・本町・新宿（しんしゅく）

と八幡宿の人びとの参加により、神社が主体となっていた。明治期になり、明治11年に郡区町村編制法により北多摩郡⁵²⁾が発足し、番場宿に郡役場が設立される頃、明治政府によって、神社の非宗教化の政策⁵³⁾がとられ、多くの神社が祭事の運営を氏子らの手に委ねていった。

徳川幕府から保護され、厚遇⁵⁴⁾を受けていた大國魂神社も、明治期になってそれが廃止となり大きな転換期を迎えた。この神領の廃止により経済面で厳しくなった大國魂神社は、くらやみ祭に使用していた御輿を四ヶ町に委託した⁵⁵⁾とされている。八朔相撲祭も、同様に四ヶ町に任され、四ヶ町に住む大國魂神社の氏子総代を中心に氏子らが八朔相撲祭の勧進元を務めた。このことが、八朔相撲祭を氏子が盛り上げる形へ変化させるきっかけとなった。明治13年には、それまでの新宿町、本町、番場宿町、八幡宿町、屋敷分村が府中駅⁵⁶⁾となり、明治26年に府中町と改称され、府中駅は多くの人びとが集まり繁栄していった。明治40年前後の頃では、近郷から力自慢の人びとが集まり、「しろとずもう」と呼ばれる盛大なものとなった。

(4-3) 昭和期の八朔相撲

明治・大正期に、全盛期を迎え近郷の人びとを集めた八朔相撲の人気は、戦前まで続いた。しかし、第二次世界大戦によって中断され空白の年が重ねられた。十数年、全国各地の祭の多くは休止とされた。この八朔相撲祭も昭和16年から昭和28年までの開催記録が見当たらず、休止した可能性が大きい。

現在の府中市は、元の四ヶ町と屋敷分村でできていた府中町とそれ以外の村多磨村、西府村と合併し府中市に組み込まれた⁵⁷⁾ものである。府中市は、昭和29年に都内市部で6番目に誕生した。合併後の急激な人口増加により、従来から在住していた四ヶ町の住人以外の人びとの比率が次第に高くなっていった。府中市の誕生時に、5万人程度であった人口は昭和35年には7万人を超えた⁵⁸⁾。ところで、四ヶ町の人びとにとっては、か

けがえのない氏神様の大國魂神社であったが、新たに流入してきた人びとにとっては必ずそうであるとは限らなかった。各町会で、かつての結束が危機を迎えるに至った。

昭和35年8月1日に、四ヶ町八朔相撲会が発足⁵⁹⁾された。発足時のメンバーは、四ヶ町とそれ以外の町会の会長や役員であった。「次第に四ヶ町でやっていた形が崩れていった。このままでは、八朔相撲祭も続けられないという危機感が生まれ、それでは何か組織を作ろうということになった。四ヶ町八朔相撲会の初代会長のAは、温厚な人柄ながら熱い想いであった。当時の府中市市長Nもまた、四ヶ町の出身であり想いは同じであった⁶⁰⁾」と会員Bは当時を回想する。それから、毎年四ヶ町八朔相撲会の実行委員会は年間に二、三回実施された。四ヶ町を中心に6つの自治会の自治体役員が中心になって話し合いながら、自治体の応援をうけ祭りの企画・実施のすべてを分担して行なうようになった。

平成2年8月1日、府中市大國魂神社において、四ヶ町八朔相撲会による400年記念の式典が挙行された。四ヶ町八朔相撲会の事業の中で、昭和61年の相撲場設立と並ぶ大事業であった⁶¹⁾。

「江戸期から続いた八朔相撲祭の大切さをしっかり後世に伝えたい⁶²⁾」との熱意から記念碑が建立された。八朔相撲祭を四ヶ町八朔相撲会の会員を中心とした大國魂神社に関わる人々が力を合せて守っていくという心意気の特徴でもあった。

八朔相撲祭の運営は、四ヶ町八朔相撲会会員であり府中市相撲連盟⁶³⁾の代表者Yが中心となって行なってきた。Yは自身の相撲経験を活かし、大学の相撲部とも関わりながら大人相撲の参加者を集めると同時に、子ども相撲の参加者を育成している。八朔相撲祭の子ども相撲は、四ヶ町八朔相撲会が発足した時に、それまで大人相撲だけであった八朔相撲祭の新しい試みとして大人相撲の前座として始められた。この八朔相撲祭を将来に向け継続していけるように子どもたちにも伝えたいという人びとの願いが込められたとされる。

八朔相撲祭は現在、正式名称を「大國魂神社

四ヶ町八朔奉納相撲⁶⁴⁾とし、五穀豊穡・天下泰平を祈り行われる奉納相撲とされる。現在の八朔相撲は、大國魂神社四ヶ町八朔相撲会が勧進元を務め、府中市相撲連盟を始め、府中市、府中市議会、府中市教育委員会、府中観光協会、むさし府中商工会議所、東京馬主協会、京王建設(株)、大國魂神社、大國魂奉賛会など多くの協賛を得ている。氏子中心のこの委員会のメンバーのほとんどが、この八朔相撲祭を子どもの時から知っている。毎年、当日には地元相撲道場出身の若者が参加する。ときには、八朔相撲祭出身の力士⁶⁵⁾も駆けつけ祭りを盛り上げる。八朔相撲祭の子ども相撲は、「府中市わんぱく相撲」と並んで、府中市の各地域の子供達にとっても大切なイベントとなっている⁶⁶⁾。

八朔相撲祭では、祭の開始前に、神殿で相撲開始の神事が為された後、宮司らによって相撲場が丁寧に浄められる。子ども相撲の開始時には、参加するすべての子どもたちが土俵の俵の内側に入り、宮司が祝詞をあげる。四ヶ町の各地域の子どもたち中心に構成されたチームによる学年別トーナメント戦で行なわれる⁶⁷⁾。子どもたちは、取り組みが終わると全員が、それぞれ氏子達から奉納された菓子や文具いっぱい袋を賞品として受け取る。祭には最後まで宮司が立ち会い、優勝者に杯を授ける。四ヶ町八朔相撲会の実行委員であり府中市相撲連盟の役員Yは、「この八朔相撲祭は神事だから、勝負だけを競うわんぱく相撲とは、そもそも目的が違う」と語った。「八朔相撲祭の目的は何か」の問いには即座に、「天下泰平、五穀豊穡」との答えが返ってきた⁶⁸⁾。

5. おわりに

本稿では、大國魂神社の八朔相撲祭の起源に関し、農事の八朔習俗の他、徳川幕府と大國魂神社の深い関係性が八朔相撲に大きな影響を与えた可能性が明らかとなった。ただし、大國魂神社は度々の兵火や大火によって多くの史料や献納品が焼失⁶⁹⁾しており、江戸期以前の史料は限定されている。通称である八朔相撲祭という名称や、正

式名称である「大國魂神社四ヶ町八朔奉納相撲」は、戦後の四ヶ町八朔相撲会に関するもの以外には記されていない。これらがいつから使われるようになったのか、また、口伝による由来の一つである水引幕が献納された経緯とその行方についても含め、今後さらに調査検討すべきことは多い。

さらにまた、大國魂神社開祖の鎌倉期以降のいずれかの時期に相撲祭の萌芽⁷⁰⁾が存在したこともあり得るという見方もある。大國魂神社の史料が焼失していても、それぞれの時期の当時の武家に関する史料に、猿渡家や大國魂神社（六所宮）のことが記録されている可能性がある。当時の猿渡家の人びとや大國魂神社の動向を知ることができれば、八朔相撲祭の起源をより鮮明に示すことができるだろう。

注および引用・参考文献

- 1) 武蔵總社大國魂神社史料 第一輯、1944年、官幣小社大國魂神社、官幣小社大國魂神社社務所、六所宮縁起、1頁では大國魂神社は、「武蔵國惣社府中六所宮者、人皇十二代景行天皇四十一年五月五日、大己貴尊出現之鎮座也、」とあり、社号を惣社六所宮している。
- 2) 大國魂神社のくらやみ祭に関しては、町方と講中がともに暗闇祭を行なうことについての研究報告がある。TEM研究所、季刊民族学、府中の暗闇祭—武蔵・大國魂神社例大祭の町方と講中、国立民族学博物館、1984年、1月1日号、50-66頁参照。また、中里亮平は、くらやみ祭の変遷に着目し、祭の形態の変遷の状況を報告した。中里亮平、日本民俗学、変更からみる祭礼の現代的状況—東京都府中市大國魂神社くらやみ祭の事例から、日本民俗学会編、2010年、261号、120-153頁参照。敦賀英輔、祭りに関わる互酬性にみる人間性の回復の可能性—府中くらやみ祭りの調査を通して、ESD環境史研究、持続可能な開発のための教育6巻、東京農工大学、2009年、105-112頁参照。
- 3) 祭の意味として、「祖霊を招き迎え供物や歌舞を捧げて歓待・饗応し、祈願や感謝をして慰撫すること。原義は不可視の神霊が現れるのをマツ（待つ）こと、出現した神霊にマツラフ、奉仕することで、神霊の意に従い服従する意味である」とある。鈴木崇、日本民俗大辞典上、吉川弘文館、2000年、577頁参照。
- 4) 岸野雄三や木下秀明の考証によると、「体育」という用語の初出は、明治9年3月『文部省雑誌』第6巻における近藤鎮三訳「独逸教育論抄」（3頁）において、「体育」が「精神の教育」の対立概念として用いられたものである。岸野、体育史、大修館、1973年、21-23頁、及び木下、日本体育史研究序説、不昧堂、1971年、49-50頁参照。

- 5) 大國魂神社境内、2015.8.1.13:20八朔相撲祭相撲場にて、大國魂神社、主典より。
- 6) 高橋晴俊、家康公と全国の東照宮、東京美術、1992年、109頁。
- 7) 府中市広報、府中市広報課、113号、昭和38年8月15日発行、及び府中市、広報ふちゅう、府中市企画調整部広報課、631号、昭和59年8月11日発行。
- 8) 祭礼と祭りという表記について「祭礼とは、祭りの儀式的ことであるが、祭りが華美になって人寄せをする傾向に至った場合に用いられることが多い」とあるように、祭りと祭礼を区別して使用する場合がある。大塚民俗学会編、日本民俗事典、弘文社、1994年、279頁、また、「祭りとは、神霊を招き迎えてこれに供献待坐し、それを慰め和ませんとする集団行事」とある。
- 9) 和歌森太郎、和歌森太郎著作集9、日本民俗学の理論、八朔考、弘文堂、1981年、342-343頁参照。
- 10) 平山敏治郎、歳時習俗考、八朔習俗、法政大学出版局、1984年、220頁「すべて農事の安穩を冀い、その害を除き祓うこの行事は八朔に多く行なわれていたのである」とある。
- 11) 二木謙一、「中世武家儀礼の研究」、吉川弘文堂、1985年、104頁及び129頁参照。また、祭・芸能・行事大辞典下、朝倉書店、2009年、1418頁で、宮内貴久は、「元々民間の農耕儀礼であったが、中世以後武家や公家の間にも広まり、たのむの祝いなどと呼ばれ贈答が行なわれていた」と記している。
- 12) 11) 前掲書、105頁。
- 13) 11) 前掲書、105頁。また、江戸期の「八朔儀礼」については、澤太郎左衛門、『舊幕府』、徳川家八朔祝賀の起因（同方会雑誌第六号抄出）、第2巻、第2号、富山房雑誌部、1898年、75-84頁に、徳川家と家臣の主従関係に関わる意味付けが記されている。さらにまた、平山は、「徳川氏の勢力の下においては、伝承はさらに意義を新たにして、武士階級の主要な儀礼となっていった。（中略）その由来は前代以来の恒例の上に、特に天正十八年八月一日徳川家康が江戸に入府した事績が回顧され、当代の開創の日として記念され、祝賀されたのである」とも記している。
- 10) 前掲書、214頁。
- 14) 大塚民俗学会、日本民俗事典、弘文堂、1994年、475頁では、八朔習俗に関し八朔の三要点として、「稲作の進行にともなう儀礼」、「八朔の贈答」、「近畿一帯に存する八朔休み」を挙げている。
- 15) 服部比呂美、「八朔の馬節供 西讃地方の団子馬製作を中心に」無形文化遺産研究報告第4号 独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所、2010年、90-91頁。
- 16) 山田邦明、日本歴史、八朔考、吉川弘文館、2000年、41頁参照。
- 17) 15) 前掲書、90-91頁、及び16) 前掲書参照。46頁で山田は、「また戦国期の南関東を押さえた北条氏の領国においても、八朔の風習は生きていたようである」として、北条氏綱の弟北條宗哲（幻庵）が、世田谷の吉良氏に嫁ぐ娘にあてて認めた覚書の一節に、主要な年中行事のひとつとして「八さく（原文のまま）」と記し、「八朔」を位置づけていることを記している。
- 18) 15) 前掲書、91頁。
- 19) 15) 前掲書、91頁。
- 20) 今野銀一郎、赤川祐一、斎藤壽胤、「矢島の神明社八朔祭」記録書、第4節「八朔祭の変遷」、秋田県矢島町教育委員会、2009年、37頁参照。
- 21) 小諸市教育委員会、「小諸八幡宮八朔相撲／指定無形文化財」
<http://www.city.komoro.lg.jp/>
2014.6.10.14:36参照。
- 22) 15) 前掲書、91頁。
- 23) 松尾大社、「松尾大社八朔祭」
<http://www.matsunoo.or.jp/hassaku/hassaku.html>

<http://www.matsunoo.or.jp/hassaku/hassaku.html> 2014.6.10.14:26

「以前は9月1日に行なわれ、昭和51年より9月第一日曜日に実施」

及び、京都市教育委員会、「京の伝統文化・祭事 松尾大社八朔祭」

<http://kyotocf.com/content/matsuri/matsuo-hassaku/> 2014.6.10.16:20参照。

- 24) 日本祭礼行事集成、第7巻、日本祭礼行事集成刊行会、1982年、193頁。
- 25) 猿渡盛厚、武蔵府中物語上巻、大國魂神社社務所、1963年、329頁では「大國魂神社は、社号を武蔵総社ともまた六所宮とも六社宮とも称した。大國魂神社と称するようになったのは、明治十八年に御祭神の御名に因った、元の社号に複旧したわけである。同年官幣社昇格の際、総社といい、六所という二つの社号を一社号の如く、総社六所宮と連称するのは、おかしいということで改称したのである」と説明されている。本稿では、復旧前の意味の場合では大國魂神社（六所宮）と表記している。
- また、大國魂神社、「宝物殿のご案内」
<https://www.ookunitamajinja.or.jp/homotsu/> 2014.6.10.17:10には、現在大國魂神社の宝物殿で御輿、大太鼓、御神宝類とともにこの文書が展示されている。「昭和49年5月末日で完成した（建坪百二十坪）」とある。家康と大國魂神社の関係を示す根拠として、500石を寄進することが記された文書がある他、徳川秀忠からの書状等、家康亡き後に徳川慶喜の自筆の社号額も保管され「徳川幕府最後の十五代将軍慶喜自筆の社号額。縦83.8cm 横214.0cm」とあり、慶喜の書としては稀な大きさといわれる。明治30年代に書かれたもので「武蔵総社」と説明されている。
- 26) 1) 前掲書は、武蔵総社大國魂神社史料 第一輯、1944年、官幣小社大國魂神社、官幣小社大國魂神社社務所には、『六所宮縁起』『武

蔵総社六所宮縁起社傳』『六所宮傳記』『武蔵総社略記』『新撰總社傳記』『新撰總社傳記考證』『武蔵總社誌』『總社傳記考證小言』『猿渡氏略系譜』が収集されている。そのなかの『新撰總社傳記考證』は盛章によって1828年に書かれた。

- 27) 1) 前掲書、新撰總社傳記考證、92頁。「寄進 六所宮 武蔵国多東郡府中之内 五百石之事 右、先規の如く、寄附せしめ訖んぬ。弥々この旨を守り、武運長久の懇祈に抽んず可し。殊には祭祀を専らにす可きの状、件の如し。天正十九年辛卯十一月 大納言源朝臣（花押）」とある。
- 28) 6) 前掲書、108頁及び、25) 前掲書参照。
- 29) 6) 前掲書、108頁、宝物殿に「馬市制札」が収蔵される。
- 30) 6) 前掲書、109頁。豊臣秀吉は奥州平定の帰路にここに立寄り家康の饗応を受けた。
- 31) 6) 前掲書、109頁。
- 32) 6) 前掲書、109頁、「神事」として、大國魂神社が主催のものであった。
- 33) 1) 前掲書、解説（書目）、1頁参照。六所宮縁起は、「猿渡家第十八代盛道が寛永元年正月に著したものである」とある。八月朔日の記載はない。
- 34) 1) 前掲書、解説（書目）、3-6頁参照。『武蔵総社六所宮縁起社傳』は、『六所宮縁起』と同様に盛道寛永元年五月の著とあり、六月廿日土用神事と七月十二日十三日の秋節神事の記載はあるが、八月朔日の記載はない。
- 35) 1) 前掲書、六所宮傳記、13頁。盛房が寛政十二年（1800）に著した。
- 36) 1) 前掲書、武蔵総社略記、21頁。盛章が文政十二年（1829）に著した。
- 37) 神楽の後の儀式である相撲の儀として、神事の相撲の可能性がある。庭上相撲（庭上角力）に関する記述では、1) 前掲書、六所宮傳記、13頁には、「八月朔、終日祭儀、少陰之中月也、五穀豊登祝之祭也、庭上乃於角觥之儀有」と記されている。また1) 前掲書、

武蔵總社誌下巻、277頁には、「八月朔日、朝御神事、卯上刻、神主以下總神官參殿、鏡餅に抜穂稻を添て獻る、別に月次恒例の御饌を獻る、御正殿祝詞の儀、前殿御神樂等の次第、例の如し、此日庭上に於て相撲の儀あり、此は秋稼宝穰を賀する意なりとぞ、又攝社八幡宮に鏡餅を獻る、御饌司等參してこれを奉仕す、禰宜・廳官の中の一員、攝社。遙拝所に向ひ、祝詞を白て獻供の事を告奉る、」と記されている。また1) 前掲書、武蔵總社略記21頁では、年中行事として「二月朔日 新年祭、三月十日 大々神樂、五月三日 競馬、同四日 終日神樂、同五日 終日神樂、此夜神輿御幸、同六日 御田植、六月廿日 終日神樂、七月七日 終日神樂、帷子祭といふ、同十二日夜・十三日朝 古例の舞樂あり、八月朔日 終日神樂、此日庭上角力の儀式あり、九月廿八日 大々神樂、十一月朔日 新嘗祭」と記されている。

38) 1) 前掲書、武蔵總社誌下巻、277頁。

39) 1) 前掲書、解説(書目)、18-19頁参照。

40) 1) 前掲書、解説(書目)、16頁、20頁参照。

「武蔵總社誌 三巻」は慶応二年(1866)「猿渡家第二十八代容盛神主の著すところで、上・中・下の三巻より成り」、著者の容盛は、非常に優れた国学者でもあったとされる。また、容盛の伝記として、「又常に心を時局に注ぎ文化年中より明治維新に至る迄見聞する所を蒐めて復古帳と名づく、五十冊あり。是を以て水戸烈公より外交問題に對して御下問を蒙り、安政五年正月及び二月の二回に互りて意見書を上り、時勢上開港の已むべからざることを建白す」とあり、徳川家は容盛に意見を求めたほど、容盛は徳川家からの信頼が厚かった。明治期では任官し、「容盛尊王の志厚くして大義に明かなしり」とある。

41) 民俗學研究所、柳田國男監修民俗學辭典、東京堂、1951年、334-335頁によると、御田植

祭について、「田遊」の一種として、「稻の豊作を豫祝する神事藝能」とある。御田植祭について、大塚民俗学会、日本民俗学事典、弘文堂、1994年、106-107頁には「稻作の予祝儀礼としての意味をもつもので農作業の各過程を、田植、あるいは収獲に至るまで模倣的に演ずる神事」とある。「旧暦の2月から3月頃までの年頭の時期に行われる事例が多い」とされ、また旧正月11日に行われる事例も紹介されているが、大國魂神社の御田植祭は、毎年5月に行われたものであった。

42) 25) 前掲書、358-359頁参照。

43) 田植を終えたばかりの田で子どもに相撲を取らせて稻を踏み荒させ、早乙女や田夫の労苦を慰めるとの説明は、実は不合理である。田植えには多くの禁忌もあり、稻の無事生育のために最も重要かつ労力を必要とするものであった。三省堂年中行事事典、三省堂、2012年、420-422頁参照。

44) 43) 前掲書参照。神事の先導役と、田んぼで相撲をする役のどちらも男児である。特に田んぼで相撲をとって苗を傷め、その苗が翌朝復活するという不思議な話は、この祭の神事性を示唆する重要な部分であるといえる。

45) 25) 前掲書、359頁。

46) 江戸城の大奥の姫君が大國魂神社の神事を訪れるには、相当の御用人の仲立ちが必要であろうと推察される。

47) 41) 前掲書参照。別名御刀代田の神事。

48) 祭・芸能・行事大辞典上、朝倉書店、2009年、316-318頁参照。田植えに関わる神事として「御田植神事は、近畿、東海、出雲、北九州、南九州、若狭地方の神社を中心に広く伝承されている。」とある。現在300か所以上の伝承地が確認されている。

49) 五穀豊穰を祈願する神事相撲は全国各地で行なわれている。ただし、子どもが田植後の田の中で相撲をとるものは、大國魂神社で行なわれていた御田植祭以外には見当たらない。相撲大事典、現代書館、2002年、435-442頁

- 参照。
- 50) 37) 前掲書に詳述。
- 51) 府中宿は、甲州街道の約7里半に位置する宿場町であり、武蔵国の中心部として栄えた。
- 52) 明治11年7月22日-郡区町村編制法の神奈川県での施行により、神奈川県多摩郡のうち1町131村の区域をもって発足した。府中宿の番場宿に郡役所を設置した。
- 53) 明治政府は「神道は宗教ではない」(神社非宗教論) という公権法解釈に立脚し、神道・神社を他宗派の上位に置く事は憲法の信教の自由とは矛盾しないと主張した。
- 54) 25) 前掲書及び28) 前掲書参照。
- 55) 本町、馬場、新宿、八幡町による四ヶ町。
- 56) 明治13年1月に、新宿町、本町、番場宿町、八幡宿町、屋敷分村が合併して神奈川県北多摩郡府中駅となった。
- 57) 多磨村は明治22年4月町村制施行により上染屋村、下染屋村、常久村、押立村、小田分村、車返村、是政村、人見村が合併。西府村は、本宿村、中河原村、四ッ谷村が合併。
- 58) 昭和38年8月1日の人口は、100,877人となり倍増した。
- 59) 四ヶ町八朔相撲会事業報告書集参照。
- 60) 四ヶ町八朔相撲会副会長B氏及び役員(会計)N及びKより聞き取り、平成27年8月1日13:30~14:30。
- 61) 四ヶ町八朔相撲会事業報告書集参照。
- 62) 5) 前掲書参照。「口伝を後世に分かり易く伝えるために、碑文の表現は吟味した」とされる。
- 63) 59) 前掲書参照。主に四ヶ町(本町・馬場宿・新宿・八幡宿)の氏子に府中市相撲連盟のメンバーも加わり構成されている。Yは、府中市相撲連盟の中心メンバーである。
- 64) 「大國魂神社四ヶ町八朔奉納相撲」の名称は、日本相撲協会の事業報告書には「大國魂神社四ヶ町八朔奉納相撲大会」と記載されている。
- 65) 青年の部の各種杯争奪トーナメントの一つに、「若兎馬記念杯」が設けられている。府中出身の力士若兎馬も、子どもの頃この八朔相撲祭に参加した経験を持つ。昭和52年(1977)府中市に生まれた若兎馬の正式の四股名は、若兎馬^{わかとぼひろみ}裕三、本名は山田^{やまだひろみ}裕三という。平成15年(2003)九月場所において28年ぶりに東京都から誕生した。平成19年(2007)九月場所を最後に引退して現在、尾車部屋付年寄押尾川親方として力士の指導育成に当たっている。断髪式には、府中市長も立ち合った。
- 66) 毎年、伊勢神宮で行われる「全国鎮守の森子供相撲大会」の選考会にも、大國魂神社からも2006年から参加しているとのことであった。
- 67) 現在の八朔相撲祭は、八朔相撲祭の式次第は、先ず少年団体の部で2ブロック内のリーグ戦(1年生から6年生まで各1人ずつ)、ブロック優勝チームによる決勝戦、中学生の個人戦、小学生の個人戦、少年の部の表彰式、功労者に対する感謝状、宮司挨拶、青年の部個人戦となっている。
- 68) 平成26年5月31日9:30~12:00、府中スポーツセンター相撲場にて、四ヶ町八朔相撲会の会員兼府中市相撲連盟役員Yと子どもたち、保護者に対しインタビューを実施。「神事相撲、八朔相撲祭を大切に伝承し続ける」との強い意志が伺えた。
- 69) 1) 前掲書、猿渡氏略系譜、307頁に「天正・正保兩年度の火災に罹り、所藏の古文書・舊期・系譜等、悉く焼失せしを以て」とある。猿渡家の史料の各所に、火災で焼失したという記述が見られる。
- 70) 菊池山哉、東国の歴史と史跡、五 神主猿渡家の系図、批評社、2000年、120-125頁、で菊池は、猿渡氏略系譜を引用し鎌倉初期から書かれている部分に着目した。